

一九七七年（六七歳）

一月二日

きょうは何もすることなく、一日家にとじこもり読んで書く。それでも蟻塚先生と分裂病を往診。

一月五日

母を訪ねる。元気でいてくれてほんとに良かったが、その母、やっとのことで私であることは分ってくれたが、その私が何をしているかについては一言も発言して来ない。

一月二十二日

夕方三時間ばかり病院の若い人たちとショウをもあわせて懇談する。その彼ら、何とかしてもっと旅させたいものである。病院での出張でも用件以外にもう一日のゆとりがあれば、その一日を使って旅もできるのに。この人たち、みんないそがしく、人手たりなく、ぎりぎり仕事しているとき、自分ひとり旅しては帰って来れないという。でも、このことは、そんな気持ちからぬけだすような討論と態勢が必要ではなかろうか。

スポーツについてもやりたいのだが、、、集団でグループでやるものが、なかなかやりづらい。その保障がほしい。

私たちがもっとも熱心に話しあったのは勉強と学習であった。みんなは心から基本的なもの、古典的なものの修得を心から望んでいる。病院で採用時の教育は形式的であるという。幹部教育はするが一般職員の教育はほとんどしていないともいう。

党生活のこと、刑務所のこと、拷問のこと、宮本委員長のこと、山下文男のことなどが話しあわれたあと、彼らは私が青年に何を求めるかときかれ、私はいつもの五つのことについて話してみた。

そしてこの人たちは班会議で大衆のなかに入ると、身がひきしまる思いでたのしいともいう。そして班会議に同じ年輩の青年たちがやってきてくれたらどんなにやり甲斐があるだろうともいいあった。

二月二十四日

ありがとう、いい按梅にゆるんでくれる。雪もふらない。おかげさまで、やってくる、やってきてくれる。小泊のはじっこからや、岩崎の県境からも。会場が一杯になる。たたかってきてよかった、たたかひの成果である。

健生病院二十五周年記念集會に、一万七〇〇〇の組合員のなかから三七〇〇人がつどってくる。村々で話しあい、となり近所さそいあつて。

大学病院もあり、市立病院もあるが、それらの病院を記念するためにこんなに多くがあつまったとは聞いたことがない。こんなにあつまることのできるということのなかに私たちのたたかひがあり、私たちの生き甲斐がある。私たちでなければならぬものがある。私たちでなければ、できないものがある。

二十五年前のこの月この日、私たちは中三のあの大きい二階にあつまり、次の二つのことをきめた。一つには、働く人たちのいのちと健康を守る親切で立派な病院をつくろうと。二つには、そうした病院をつくるために私たちは津軽保健生活協同組合に結集しよう。

そして、いままで二十五年間、私たちは歩みつづけた、たたかひつづけた。

そしていま、第一のきめごとの病院づくりはどうなっている。

私たちの健生病院はいまだ二つ。和徳の病院は三〇〇ベッド、お医者さんが一四人。藤代の病院は六人。職員の数も四三五人。

ガンの診察治療では、たとえば早期ガンの発見と手術では大学病院と肩を並べている。ピーポーピーポーで持ちこまれる脳卒中の取り扱いでも、リハビリでも、私たちの健生病院は県内のトップを行っている。整形外科では、大学から木村助教授を迎え地域の要求にこたえている。

かてて加えて精神神経科では日本でも典型をなすデールーム、全国に幾つもないアルコール病棟などなど、私は第一のきめごとを苦しみながら、模索しながら、これまでやってきたのである。

だが、まだまだ不十分である。検査病棟もほしい、アイソトープもほしい、整形外科の病室も足りない。もっともっとお医者さんを、もっと多くの看護婦さんをほしい。

だから私は記念集会の檀上からつどった三七〇〇人の組合員にみなさんの子供さんを医学部に看護学院に入れて下さいと訴えるのであった。もっといい病院にしようとも。

二十五年前の第二のきめごと。生協組合に結集する課題はいま一七,五三五という偉大な数に到達している。ほんとうによかった、ありがとう。こんな力強い、こんなうれしいことはそうめったにあるものではない。

組合員の出資金は一億一〇〇〇万円をこしている。これも偉大な成果である。だが病院のいまの総資産は一七億円。とすれば私たちの出資金は必要な資金のたったの一〇分の一。もっと多くの出資を、もっと金のある病院組織を。それが私たちのいまから歩む道でもある。

健生病院二十五年万歳

津軽保健生協二十五年万歳

二十五年たって

びっくり二つの

大病院

二月二十五日

司馬遼太郎の“花神”を読みはじめる。シーボルトの故事や蘭学の事始が分かり、なかなか面白い。その中からの言葉の一つ二つ。

“医師というものはとびきりの親切者以外はなるべきことではない”

“無償の親切”

“医の世に生活するは人のためにのみ。おのれがためにあらずということとその業の本旨とす”

四月三十日

ひる頃病院にゆき、挨拶や頼みやら。ひるすぎ藤代病院で、医局の人たちと。

五月二日

藤代病院の朝の会で高橋先生の辞任を発表する。

五月十四日

久里浜病院アルコール症病棟と研究棟の開院式に出席する。

五月二十三日

またひとり、弘前への旅。弘前では高橋先生の送別会に参加。

八月七日

こんどの大雨で床上浸水をした病院の職員の家を木村専務の案内で見舞いしてまわる。

八月二十四日

和徳の入院患者を見舞いしてまわる。夜、藤代の盆おどり。

十二月十七日

管理病棟修祓式、藤代病院記念碑除幕式。

記念碑に私の

“往診は

いもの花咲く

野をすぎて”

が刻まれる。下手な字で恥しい。

了